

「再び宮の中で」

マルコの福音書 11:27~12:12

はじめに

前はイエシュアがエルサレムの神殿に入れ、そこにいた両替人や商人たちを追い出されたという出来事について述べましたが、今日はその続きになります。イエシュアは再び神殿に入れ、今度は祭司長や律法学者、長老たちという当時のユダヤ人指導者たちと論じ合われます。その内容について、今日も神のご計画の視点「神の国」の視点で見たいと思います。

1. 言いません

マルコの福音書【新改訳 2017】

11:27 彼らは再びエルサレムに来た。イエスが宮の中を歩いておられると、祭司長たち、律法学者たち、長老たちがやって来て、

11:28 こう言った。「何の権威によって、これらのことをしているのですか。だれがあなたに、これらのことをする権威を授けたのですか。」

11:29 イエスは彼らに言われた。「わたしも一言尋ねましょう。それに答えなさい。そうしたら、何の権威によってこれらのことをしているのか、わたしも言いましょ。

11:30 ヨハネのバプテスマは、天から来たのですか、それとも人から出たのですか。わたしに答えなさい。」

11:31 すると、彼らは論じ合った。「もし、天から来たと言え、それならなぜ、ヨハネを信じなかったのかと言うだろう。

11:32 だが、人から出たと言え——。」彼らは群衆を恐れていた。人々がみな、ヨハネは確かに預言者だと思っていたからである。

11:33 そこで、彼らはイエスに、「分かりません」と答えた。するとイエスは彼らに言われた。「わたしも、何の権威によってこれらのことをするのか、あなたがたに言いません。」

イエシュアとユダヤ人指導者たちとの問答が展開されています。しかし問答と言っても質問に対し逆に質問が返され、両者に一切の和解も歩み寄りもなく、最終的にイエシュアの「あなたがたに言いません」という一言で決着するという、いわゆる物別れ状態、両者の非常に険悪な雰囲気は何え。しかしこのような一見殺伐とした状況の中にも神のご計画の完成「神の国」は表されているのです。なぜならこの出来事は大前提として「再びエルサレムに来た…イエスが宮の中を歩いておられる」という状況で起こった、表されたことと記されているからです。イエシュアが再びエルサレムに、その宮に帰って来られること、その姿、様子は終わりの日に起こる、イエシュアの地上再臨を指し示す「型」であると考えられます。イエシュアが再び来られるその目的は、イスラエルの民をご自分の民、神の所有の民とするためであり、それは以下の預言の成就であると考えられます。

エレミヤ書【新改訳 2017】

31:33 これらの日の後に、わたしがイスラエルの家と結ぶ契約はこうである——【主】のことば——。わたしは、わたしの律法を彼らのただ中に置き、彼らの心にこれを書き記す。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。

31:34 彼らはもはや、それぞれ隣人に、あるいはそれぞれ兄弟に、『【主】を知れ』と言って教えることはない。彼らがみな、身分の低い者から高い者まで、わたしを知るようになるからだ——【主】のことば——。わたしが彼らの不義を赦し、もはや彼らの罪を思い起こさないからだ。」

このように、神はやがて「イスラエルの家」が神について、聖書について互いに質問し合ったり、また教え合ったり、論じ合ったりすることがなくなると約束しておられます。それは、神がご自身の御心である「律法を彼らのただ中に置き、彼らの心にこれを書き記す」ため、「彼らがみな、身分の低い者から高い者まで、わたしを知るようになる」ため、もはや教えるという必要性がなくなる、まさにある意味で「問答無用」の状態になるという「契約」ご計画をお持ちなのです。神とイスラエル、神と人が、一切の誤解も偽りもなく分かり合える世界、ひとつになる世界、それが神のご計画の完成である「神の国」です。イエシュアとユダヤ人指導者たちとのやり取りは、一見これとは真逆の状況に思われますが、律法の体现者、生ける律法であるイエシュアがエルサレムの宮の中に、すなわち当時のユダヤ人たちの象徴、心の抛り所、まさに「ただ中」におられ、そして互いに「それぞれ…教えることはない」という点においては、この預言の「型」を見事に表していると言えます。神について、その「権威」について、もはや互いに「教えることはない」教え合わない、そんな状況が確かにここには作り出されているのです。

またイエシュアはユダヤ人指導者たちに対して「ヨハネのバプテスマ」について質問されました。彼らはこれを「分かりません」知らない、と答えました。状況としては否定的で拒絶的な反応です。しかし「神の国」の視点において、その「型」として見るならば、彼らのこの答えは、なんと大正解です。なぜなら「神の国」において神と人、イエシュアとイスラエルの間にはもはやバプテスマのような、神との関係を築くために踏まなければならないような手続き、すなわち悔い改めなければならない罪はなく、またヨハネに象徴される預言者のような、神と人との間を取り持つ仲介的な存在もとりなし手も必要ない、知らないような状態となるからです。ちなみにイエシュアはこのヨハネについてこうも言っておられます。

マタイの福音書【新改訳 2017】

11:11 まことに、あなたがたに言います。女から生まれた者の中で、バプテスマのヨハネより偉大な者は現れませんでした。しかし、天の御国で一番小さい者でさえ、彼より偉大です。

「天の御国」「神の国」においては、もはやヨハネのような、罪人を悔い改めに導く預言者は、まさに「天から」来ることも、あるいは「人から」出てくる必要もないのです。それはつまり、神が「彼らの不義を赦し、もはや彼らの罪を思い起こさないから」であり、そしてもはや新たに教えられる必要のないほどに「身分の低い者から高い者まで」、「天の御国で一番小さい者でさえ」完全に神を、その御心を「知るようになるから」です。

このように、「再びエルサレムにきた…イエスが宮の中を歩いておられる」時に起こった、イエシュアとユダヤ人指導者たちとの問答には、険悪な殺伐とした目に浮かぶその状況とは裏腹に、終わりの日に、

再びイエシュアが地上に、エルサレムの神殿に来られるその時、神と人とが全く和解、和合してともにいる、ともに住むという、まさに真逆とも言える状況が成就、実現するという神のご計画の「型」が、ここには表されているのです。

今私たちは神について、聖書について、教えられなければならない、知らないことだらけです。しかし「神の国」においてそれらはすべて明らかにされます。私たちは、神が私たち一人ひとりをよくご存じであられるように、私たちもまた完全に神を理解し、この御方を完全に知るようになります。その実現、神が「イスラエルの家と結ぶ契約」を果たされるプロセス、方法が次のイエシュアのたとえ話に表されています。

2. ぶどう園のたとえ

マルコの福音書【新改訳 2017】

12:1 それからイエスは、たとえで彼らに話し始められた。「ある人がぶどう園を造った。垣根を巡らし、踏み場を掘り、見張りやぐらを建て、それを農夫たちに貸して旅に出た。

12:2 収穫の時になったので、ぶどう園の収穫の一部を受け取るため、農夫たちのところにしもべを遣わした。

12:3 ところが、彼らはそのしもべを捕らえて打ちたたき、何も持たせないで送り返した。

12:4 そこで、主人は再び別のしもべを遣わしたが、農夫たちはその頭を殴り、辱めた。

12:5 また別のしもべを遣わしたが、これを殺してしまった。さらに、多くのしもべを遣わしたが、打ちたたいたり、殺したりした。

12:6 しかし、主人にはもう一人、愛する息子がいた。彼は『私の息子なら敬ってくれるだろう』と言って、最後に、息子を彼らのところに遣わした。

12:7 すると、農夫たちは話し合った。『あれは跡取りだ。さあ、殺してしまおう。そうすれば、相続財産は自分たちのものになる。』

12:8 そして、彼を捕らえて殺し、ぶどう園の外に投げ捨てた。

12:9 ぶどう園の主人はどうするでしょうか。やって来て、農夫たちを殺し、ぶどう園をほかの人たちに与えるでしょう。

「ある人がぶどう園を造った」ここに使われているナータ(נֶטֶר)は本来、神がエデンの園を設けられた、造られたことを指す言葉です（創世記 2:8）。ですからイエシュアが指し示しておられる神のご計画の完成である「天の御国、神の国」とはこのエデンの園の回復、復興であることがここに表されていると考えられます。ですからこのぶどう園を造った主人とはもちろん神を表しており、そしてその主人に逆らい、そのしもべらを殺し、主人の一人息子までも殺してしまう悪い農夫たちが、ユダヤ人指導者たちを指してイエシュアは語っておられると考えられます。それはイスラエルの歴史において多くの預言者たちが当時の指導者たちによって迫害され、殺されてきた事実と、神の「愛する息子」であるイエシュアを十字架にかけて殺してしまう事実を表しています。その結果、神はイスラエルを滅ぼし、エデンの回復としての「神の国」のご計画としての福音は異邦人の教会へと引き継がれていきます。それが「ぶどう園の主人は…やって来て、農夫たちを殺し、ぶどう園をほかの人たちに与えるでしょう。」というたとえの意味であると考えられます。今日もなおユダヤ人指導者たちはイエシュアを否定し、この御方がイスラエルの神の御子

メシアであることを受け入れず、その思いと考えの中で今も神の「愛する息子」を殺し、除外し続けています。そして私たち異邦人の教会は「ほかの人たちに」とたとえられた存在として、神のご計画としての福音に与っています。

しかしこれで終わりではない、これが「神の国」の完成ではないことを示すために、イエシュアはすかさず次の聖書の預言を引用して語っておられます。

3. 不思議なこと

マルコの福音書【新改訳 2017】

12:10 あなたがたは、次の聖書のことばを読んだことがないのですか。『家を建てる者たちが捨てた石、それが要の石となった。』

12:11 これは主がなさったこと。私たちの目には不思議なことだ。』

この御言葉は詩篇からの引用です。

詩篇【新改訳 2017】

118:22 家を建てる者たちが捨てた石それが要の石となった。

118:23 これは【主】がなさったこと。私たちの目には不思議なことだ。

118:24 これは【主】が設けられた日。この日を楽しみ喜ぼう。

118:25 ああ【主】よどうか救ってください。ああ【主】よどうか栄えさせてください。

118:26 祝福あれ【主】の御名によって来られる方に。私たちは【主】の家からあなたがたを祝福する。

「【主】の家」すなわち「神の国」、それがどのようにして建てられるのかがここには記されています。「家を建てる者たちが捨てた石…要の石」それはイエシュアを指しています（使徒 4:11、I ペテロ 2:4）。そしてイエシュアはこの詩篇を引用し、このようにも語っておられます。

マタイの福音書【新改訳 2017】

23:39 わたしはおまへたちに言う。今から後、『祝福あれ、主の御名によって来られる方に』とおまへたちが言う時が来るまで、決しておまへたちがわたしを見ることはない。』

上記のこのイエシュアの御言葉は、パリサイ人、律法学者すなわちユダヤ人指導者たちに対して語られたものなのです。つまりユダヤ人指導者たちがみなイエシュアが神の御子メシアであることを受け入れ、その真実に目が開かれる時、彼らはこのように告白し、イエシュアは再びこの地上に、エルサレムに帰って来られるということです。そしてイエシュアは「要の石」王なるメシアとしてこの地上に「主の家、神の国」を建てられるのです。このように、神のご計画において、ユダヤ人指導者たちに代表されるイスラエルの民は、神の敵でも見捨てられた存在でもなく、彼らの開眼、彼らの回心、悔い改めこそが「神の国」という神のご計画の完成をもたらすのです。そしてそれは必ず実現します。それがたとえ人の「目には不思議なこと」不可能なことのよう思えたとしても、神にとって不可能なことなどないのです（創世記 18:14）。

4. 気づいた

マルコの福音書【新改訳 2017】

12:12 彼らは、このたとえ話が自分たちを指して語られたことに気づいたので、イエスを捕らえようと思ったが、群衆を恐れた。それでイエスを残して立ち去った。

御言葉を聞き、また聖書を読み、何を気づくか、何に気がつくか、何を見、どのように受け取るのか。ここでイエシュアの御言葉を聞いたユダヤ人たちは、自分たちが主人のしもべたちと息子を殺した農夫たちにたとえられていることに気づきました。しかしその直後に語られている詩篇の引用と、その指し示す意味には気づくことがありませんでした。そしてその結果、彼らはイエシュアから離れ去って行ったのです。この事実は、今の私たちにも重要なメッセージを伝えています。それは自分の罪や悪事に気づき、そこに目をとめるだけでは、私たちも彼らユダヤ人たちのように、恐れの中にあり、まだまだ神から遠く離れているということです。私たちが気づくべきなのは、私たちが罪と恐れの中にあるということだけでなく、その罪と恐れから救ってくださる御方、イエシュアがおられるということ、そしてこの御方が「**私たちの目には不思議なこと**」と言われる、どのような奇蹟、どのような御業をもってそれを成してくださるのかということなのです。このように、神のご計画に気づく、目をとめるという考え方、そしてそこから生じる生き方は、私たちの心と思いを罪の問題と、そして死の恐れから守り、神に近づく、すなわち神の御心に寄り添わせる、神の視点を持たせるという効果、働きがあるのです。それは架空のドラマや物語、現実離れたゲームやアニメなどに夢中になることに似ています。それに夢中になっている間、私たちは辛い現実やつまらない日常、生きることの苦しみを忘れることができるからです。しかし所詮それらは架空のものすなわち偽り、まやかしです。しかし聖書に記された神のご計画に、その壮大なドラマに、神の企画されたその一大イベントに夢中になるならば、そこには確かな希望があります。なぜなら神のご計画は必ず起こる確かな現実だからです。ぜひますますこの神のご計画に対して、夢中になられることをお勧めします。聖霊の助けがありますように。